

NON NOVEL



長編推理小説

笛沢左保 断崖の愛人



NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一ヵ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を發し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていききたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく發見されていくものだと思えます。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」發見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—95

長編推理小説 断崖の愛人

定価 680円

昭和54年3月1日
昭和57年3月25日

初版第1刷發行
第8刷發行

著者	笹 沢 左 保
發行者	伊 賀 弘三良
發行所	しょう 伝 社
〒101	東京都千代田区神田神保町 3-6-5
	九段尚学ビル
	電話 03 (265) 2081
印刷所	萩 原 印 刷
製本所	明 泉 堂

万一、落丁・乱丁がありました場合は、お取りかえします。Printed in Japan.

0293 200095-3440

©Saho Sasazawa, 1979

長編推理小説

沢左保 崖の愛人

祥伝社

この作品は、小学館発行の「女性セブン」に、昭和53年2月23日号から昭和54年3月1日号まで連載されたものに加筆、修正したものです。

奇妙な仲間 ミナモト 8

見られた夜 21

旅立ちの決意 34

姑しゅうごの過去 47

険悪いづとの一途 60

電話に出た女 73

恐怖の女神 86

影の存在 99

愛人の部屋 112

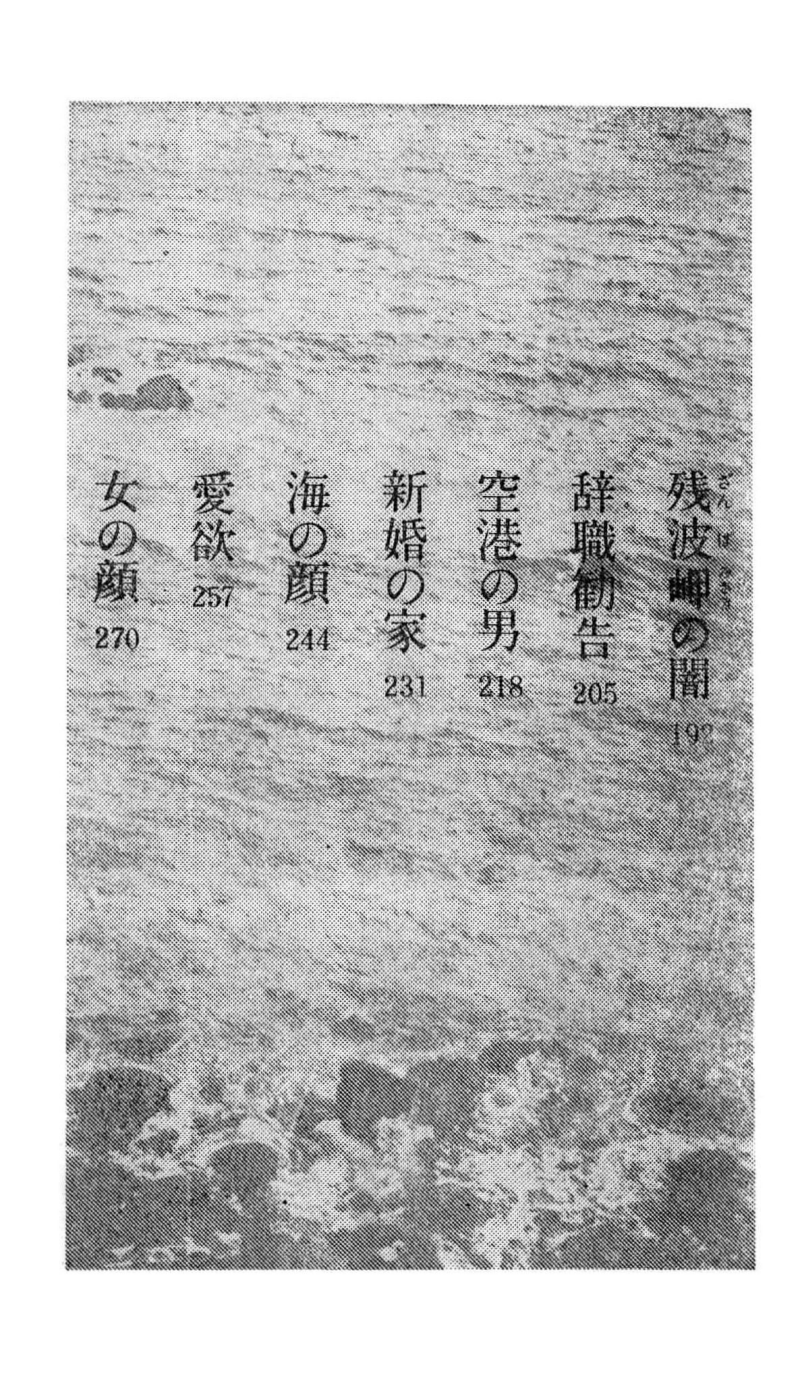
声だけの告白 126

通夜の刑事 136

悪い噂 152

蜜の夜 165

第二の死 179



残波岬の閣 さんげつみ
192

辞職勧告 205

空港の男 218

新婚の家 231

海の顔 244

愛欲 257

女の顔 270

罨 わな
283

対決のとき
296

残された謎
309

靄 もやに消える
322

奇妙な仲人

1

その男の顔を見たとき、おやつと思った。男の顔には、見覚えがあった。男がここに姿を現わしたのは、確か五カ月ぶりだという記憶もはっきりしていた。去年の十一月だったが、男は五、六回ここを訪れている。

十二月にはいると、ふつとり姿を見せなくなった。それから五カ月が過ぎていく。もう、その男のことなど、すっかり忘れていた。それがいま当たり前みたいな顔で、ひょっこり厚生課の部屋へはいって来たのである。

もちろん、男のお目当ては、安城由布子に違いない。

去年の十一月も五、六回、男は安城由布子のところへ通い詰めたのである。男が気安く口をきける相手は、安城由布子を除いて厚生課にはひとりもないのだ。

去年の十一月に、初めてこの部屋を訪れて来たときも、男はいきなり安城由布子の前に立った。男は名刺を差し出した。その名刺にあった肩書きも名前も、いまでは忘れてしまっている。

「お願いがあつて、参りました」

四十半ばの男は、何度も続けざまに頭を下げた。

「どちらさまのご紹介でしょうか」

安城由布子は訊いた。初めて見る相手には、そう質問することになっているのである。紹介や前触れなしに、新顔が安城由布子の席を訪れるはずはなかったからだつた。

「いや、いきなりお伺いしたんです」

四十男はまた頭を下げて、安城由布子に笑いかけた。

「いきなりって……」

安城由布子は、戸惑っていた。こうした客は、前例がなかったのだ。

「こうなっているんですから、いいんじゃないですか」

四十男は、安城由布子の机の上にあるアルミのプレート、指さした。そのプレートには、『厚生課外来係・安城由布子』と記されている。

「それは確かに外来係ですから、厚生関係の業者の方たちは、みなさんここに来られます。でも、これまで無関係だった業者がいきなりおみえになっても、受け付けることは許されておりません」

四十男を見上げて、安城由布子は歯切れよく言った。

「まあ、この中外軽金属さんみたいな大企業ともなると、そういうことになりましような」

四十男は、へらへらと笑った。媚びる目つきだし、態度が卑屈である。だが、それでいて、妙に厚かましい感じがする。

「どうぞ、お引き取りください」

安城由布子のほうは、ニコリともしなかった。

「あなたみたいに美しいお嬢さんが、そんな怖い顔をしたら、男の楽しみがひとつ減りますよ。とにかく、せっかくこうして来たんですから、話だけでも聞いてやってください」

「でも、セールスなんでしょ」

「いやいや、セールスとは違うんです。実はこちらの社員のみなさんに、モニターをお願いしようと思ひまして、参上したというわけなんですよ」

「モニター……」

「お嬢さんも、ご存じでしょう。自動マッサージ・チェアってやつでして、温泉の旅館なんかでよく見かけますね。アーム・チェアみたいになっていてコインを入れると、自動的に肩をたたいたり、背中をマッサージしたりする……」

「見たことはあります」

「当社では、その自動マッサージ・チェアの画期的な新製品を、開発したというわけでしてね。その試作品を五、六台、こちらに置かせていただきます。それを社員のみなさまにお昼休みなど、ご自由に使ってくださいます。もちろん硬貨を入れなくても、使えるようになっておりますね」

「それだけのことなんですか」

「あとは社員のみなさまから、ご使用後の感想をいただければ、それでもう十分なんです。まあ、そういう意味でのモニターでして……」

「よくわかりました。一応、上司に伝えます」

「そうですか。ひとつよろしく、お願い致します」

そのときの四十男は、それだけで引き揚げていった。

安城由布子はそのことを、上司に報告もしなかった。

そんな報告を、上司が受け付けるはずはない。それにインチキだと、安城由布子にもわかっていたからである。商売にならない話を持ち込んでくるのは、インチキに決まっているのだ。

その後も男は一週間に一度ずつ、厚生課の安城由布子の席を訪れた。まだ許可はおりにないかと尋ねるだ

けで、男はそれ以上の仕事の話はしなかった。五、六分、由布子と話し込んで帰っていく。

それも、五回ほどで終わった。新製品のカタログも説明書も持つてこないまま、十二月にはいると男は姿を現わさなくなったのだ。インキキは通用しないと察したのか、望みはないと諦めたかしたのに違いない。

いずれにしても、この男が厚生課の部屋へはいつてくるたびに、安城由布子はおやつと思わずにいられたかった。それは、男がただの一度も受付を通じて、由布子に面会を求めたことがなかったからである。

東京・千代田区ちよだの大手町一丁目にある中外軽金属ビルおおてまの正面入口には常時、三人の受付嬢と二名のガードマンが勤務についている。外来者は受付嬢のカウンターに、立ち寄ることになっていた。

社員とは認められないような人間はガードマンがチェックしている。そうした人間が勝手にエレベーター・ホールへ向かったりすれば、ガードマンが呼びとめて受付嬢に引き継ぐことになる。

ところが、その男に限っては受付嬢やガードマンの目にとまることなく、ビルの中へはいって来ているらしいのだ。不可能なことではないが、毎度それができるとな

ると、やはり不思議であった。

年が明けて、やがて冬も去り、春が訪れた。安城由布子の毎日は、厚生関係の外来者を相手に忙しい。その外来者のうちのひとりで、五カ月間も連絡が途絶とだえている男のことなど、覚えてはいるはずはなかった。

四月もあと二日ほどで、いよいよ新緑の候であった。その日の昼休み、安城由布子は受け取ったばかりの手紙を自分の席で読み返していた。郷里の母親からの手紙であった。例によって縁談をすすめる内容ではあったが、手紙には母親らしい季節感が盛られていた。

東京とは違って郊外へ出れば、山吹やまぶきの花が見られます、もう、藤の花も咲いています。昼間のうちに外出すると汗ばむくらいで、新緑が目にしるようです。

ただ以前のように、カエルや春蟬はるせうの声は聞けません。故郷の自然に接するためにも、休暇をとって帰って来たらいいがですか。

そこまで読み返して、安城由布子は何気なく目を上げた。その由布子の目に五カ月ぶりに見る男の姿が映じたのである。男ははたして、真直ぐ由布子の席へ足を運ん

で来た。

まるで条件反射のように、このときも由布子はおやつと思わずにはいらなかったのだった。

2

男は相変わらず、風采^{ふうさい}の上がらない恰好であった。

白いものがまじった髪の毛をばさばさにして、髭^{ひげ}もきれいには剃^そっていないかった。色の悪い顔は頬^ほがこけているせいか、馬のように長く見える。目つきが鋭いので、眼差^{まなざ}しだけに活力が感じられる。

古ぼけた背広を着て、流行遅れのネクタイを締めている。靴も磨いてないし、ズボンはよれよれだった。やや猫背で、媚^こびるように笑い、卑屈な態度を崩さないというところも、まったく変わっていないかった。

「安城さん、どうもお久しぶりでございます」

男は由布子の前に立って、目を細めて嬉^{うれ}しそうに笑った。

「本当に……。五カ月ぶりかしら」

由布子も、釣られて笑いを浮かべた。インチキ臭い男ではあるが、なんとなく憎めない感じなのだ。

「相変わらず、お美しいですな。セーラー服を着た高校

生から新婚の奥さんになるまで欠かかなかったクリームという宣伝、化粧品会社のテレビのコマーシャルが、いま評判になっているでしょう。あのコマーシャルで二役を演じているタレントを、ご存じだと思いませんか」

「売出し中のモデルさんでしょ」

「そのモデルさんに、安城さんがそっくりだってことに、わたしは気がつきましたよ」

「そうですか」

「いや、これはお世辞じゃありません。事実を、言っているんです」

「でも、あのモデルさんは、まだ十八歳だそうですね」

「安城さんは、確か二十三……」

「四になりました」

「六つも違うとおっしゃりたいんでしょうが、そんなのは問題じゃない。よく見ると肌なんか、安城さんのほうがずっときれいです。それにあなたには気品と、清潔感がありますからね」

「どうも、ありがとうございます」

「あのコマーシャルのモデルさんによく似ているって、周囲の人たちからも言われるでしょう」

「さあ、どうかしら」

由布子は、首をかしげた。一応は、肯定している答え方であった。事実、そのとおりなのである。いま評判になっているテレビ・コマーシャルのモデルにそっくりだと、このところ冷やかされてばかりいるのだった。

だが、男のお世辞に乗せられてはならないと、由布子は表情を引き締めていた。まずはこの男の名前を、思い出すべきである。名刺にどのような活字が印刷されていただろうか、由布子は記憶を探っていた。

「五カ月ぶりにお目にかかるんですから、あらためて名乗ることにいたしましょう。わたしは阿久津忠雄と申します」

男がニヤニヤしながら、そう言って頭を下げた。男は由布子の目つきから彼女の思惑を見抜いたようだった。

そうだった、阿久津忠雄に間違いない、と由布子は名刺の活字を思い出していた。

「それで、今日のご用件は……？」

由布子は笑いのない顔で、阿久津という四十男を見上げた。

「例のお願いはもうとくに諦めましたし、今日はプライベートなことでお伺いしたんですよ」

阿久津という四十男は、媚びる目で笑った。

「プライベートなことって……？」

由布子は、警戒していた。よく知らない男から、プライベートな話を持ち込まれるはずはない。それに、阿久津という男の厚かましさが、ひどく気になったのである。

「だからこうして、お昼休みの時間を選んで、お邪魔したんじゃないですか」

阿久津は、身を乗り出すようにした。

そう言われれば確かに、いまは昼休みであった。勤務時間内でなければ、外来の業者と仕事の話をすることはない。課長も二人の係長も、席にはいなかった。二十人の厚生課員のうち、部屋に残っているのは三、四人だけである。

「プライベートなことって、いったい何なんですか」

由布子は訊いた。

「今日のわたしは、お仲人役でしてね」

ニヤリとしたあと、阿久津は妙なことを言い出した。

「お仲人……？」

由布子は、あつげにとられていた。

「これをまず、お受け取りください」

阿久津が由布子の目の前に、何やらプログラムのようなものを置いた。

由布子は、それに目を落とした。プログラムに、小さな袋が添えてある。有楽町の劇場で公演中の、芝居のプログラムだった。映画と新劇の二人の女優が主役を演じて、目下のところ大評判になっている芝居であった。

小さな袋の中身はもちろん、その芝居の指定席券ということになる。阿久津がなぜ、このようなものをよこすのか。まさか芝居に招待して、由布子を買収するという魂胆ではないだろう。

それに阿久津は、仲人役だと奇妙なことを口にした。仲人役とは、男女を結びつけることにある。それは、いったいどういうことを、意味しているのだろうか。

「これは……？」

「今夜の券でしてね。開演は、六時十分です」

「わたしがどうして、この芝居を見にいかなければなら
ないんですか」

「この劇場へいらして、指定の席におすわりになればわかります」

「そんなお話に、応じられるわけがないでしょう」

「まあ、そうおっしゃらずに……。ひとつ、仲人役の顔を立ててやってください」

「阿久津さんが、誰かに頼まれたってことなんですよ」

「そうなんです。それが、仲人役というものですからね」

「誰に頼まれたんですか」

「それを言わなくちゃいけませんか」

「当然じゃありませんか」

「できれば、前もってはお教えしたくはなかったんですがね」

「言ってください」

「仕方がない、言いましょう。あなたを芝居に招待されたのは、製品管理課の係長さんですよ」

「製品管理課の……？」

「つまり、井ノ口一也さんということになりますな」

阿久津は、声をひそめて言った。

「え……！」

小さく叫んだあと、由布子は狼狽気味にあたりを見回していた。だが、由布子のほうへ、目を向けている者はいなかった。

由布子は一瞬、上気するように熱くなった顔を伏せていた。心臓をしめつけられるように胸が痛んで、由布子はズキズキと鳴る鼓動を自分の耳で聞いた。頭の中では、思考がまとまらなくなっていた。

「そんなに顔を赤くしたら、人に気づかれますよ。じゃ

あ、これでわたしの役目は、果たしたってことになりま
すから……」

小さな声を残して、阿久津は由布子に背を向けた。

由布子には、口にすべき言葉がなかった。とにかく顔を
上げて、厚生課の部屋を出て行く阿久津忠雄の後ろ姿
を見送った。しかし、由布子はそれを、意識に捉えては
いなかった。ただ、彼女の目に映じただけだった。

井ノロ一也——。

それは一年ほど前から、由布子の心の中で生き続けて
いる男の名前であった。一日に何度か思い出し、忘れき
ることができない男でもある。大きな障害さえなければ、
とくに距離が縮まっていたはずの男だった。

安城由布子は、ぼんやりと考え込んでいた。

3

『中外軽金属』東京本社の厚生課には共済係と、福祉係
の二つの係がある。その管轄は東京本社と千葉工場だけ
で、名古屋工場、広島工場、九州の延岡工場までには及
んでいない。

共済係は、共済組合による健康保険、運用資金からの
各種貸付、退職時の積立金返済などを業務としている。

福祉係は社内の食堂、喫茶、日常品販売、医務課の医
薬品や医療機具などの管理と調達、それに幹旋を担当し
ていた。つまり、社員の厚生福祉に関係する業者との接
触を、一手に引き受けている係であった。

その厚生課の窓口が外来係ということになる。外来係
というのはひとりだけで、福祉係の所属となっている。
厚生課の業務内容に精通していないと、外来係は動まら
なかった。

安城由布子は短大を卒業して中外軽金属の本社に入社
すると、すぐに厚生課共済係に配属となり、一年後には
隣りの福祉係へ移った。そしてさらに一年六カ月後、一
昨年の十月から外来係の席にすわるようになったのであ
る。

いまでは勤続四年であり、厚生課の女子社員に限って
は後輩のほうが多くなった。ベテランとして外来係の席
を動かされることもないだろう。素直で明るくて上品な
美人ということで、上司や訪問客のあいだでも評判がよ
かった。

そうした安城由布子が外来係を命じられた一昨年の秋
の人事異動で、福祉係長として厚生課に迎えられたのが
井ノロ一也だったのである。当時の井ノロ一也は、三十

四歳であつた。

中外軽金屬という大企業の本社でも、三十四歳の係長は特に珍しくなかつた。いわゆるエリート社員であれば、もつと若くて係長になっている。ひとつには中外軽金屬の伝統というものが、そうさせているのである。

一流国立大学卒という学歴プラス実力が、エリート・コースを歩む基本的な条件とされているのだ。一流国立大学を卒業していても、実力に欠けていれば出世は望めない。

だからけつして学歴偏重主義とは言いきれない。しかし、実力の点で一線に並んだ場合、早い昇進を決めるのは一流国立大学という出身校なのである。

たとえば、安城由布子が入社して一年後に厚生課長となつた五代弘樹などは、井ノロ一也と年も同じだし、入社も同期だつた。それでいて五代弘樹は三十三歳で課長になり、一方の井ノロ一也は一年半も遅れて、ようやく係長に昇進している。

この差にしても、五代は一流国立大学、井ノロは同じ一流でも私大と、出身校の違いが作用しているのであつた。

もつとも、五代弘樹と比較しては、井ノロ一也に気の

毒だつた。五代の場合は特別で、エリート中のエリートとされていたのだ。切れ者、やり手、実力ナンバーワン、出世頭と評判の五代だつたのである。

その五代課長の下に、井ノロ一也が係長として就任したとき、厚生課の女子社員は五代派と井ノロ派に二分された。異例のスピード出世を誇る若き花形課長にაცოგれる女子社員たちは、むしろ井ノロ一也に対して冷淡であつた。

「やっぱり、迫力が違うわよ」

「そうねえ。課長のあの、人を射すくめるような目と、比べてごらんなさいよ。井ノロ係長の目は半分、眠っているみたいだわ」

「井ノロ係長には、課長みたいな男臭さがないわね」

「貫禄だつて、まるで違うでしょ。同じ年とは、どうしても思えないわ」

「四十代で重役という前評判の課長ですもの。水があきすぎているわよ」

「五代課長と一緒にいると、井ノロ係長はただの平凡なサラリーマンで感じね」

「男だつたら、同期の五代の下で働くなんてごめんだつて、異動を拒否すべきだわ」